

牢獄からのラブレター

| | |
|-------|------------------|
| 奨励 | 山下 壮起 [やました・そうき] |
| 奨励者紹介 | 日本キリスト教団扇町教会伝道師 |

あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

(コロサイの信徒への手紙 3章12ー14節)

2013年モアハウス卒業式

私はアメリカのジョージア州アトランタにあるモアハウス・カレッジという大学で学びました。モアハウス・カレッジは、1867年、奴隷制から解放されたアフリカ系アメリカ人男子の教師と聖職者を養成する目的で建てられた学校です。そのモアハウス・カレッジで、昨年5月19日に行われた卒業式では、現アメリカ大統領のバラク・オバマが式辞を述べ、大きなニュースとなりました。

オバマ大統領は式辞のなかで、1940年から1967年までモアハウス・カレッジの学長を務めたベンジャミン・メイズの残した言葉を引用しました。こんな言葉です。「モアハウス・カレッジだけでなく、どの大学も、有能な学生を育てるだけでは十分ではない。誠実な人物、公共の場においても私的な場においても信頼のできる人物、そして、社会における不正、痛み、不正義に敏感であり、それらの社会悪を正すための責任を喜んで受け入れる人物を育てなければならない」（1945年2月19日 モアハウス・カレッジ創立78周年記念のラジオ演説より）。

このような言葉を残したメイズ学長のもとで学生生活を送ったのが、公民権運動の中心的な指導者だったマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師でした。今から51年前の1963年の8月、キング牧師は「私は夢がある」という有名なスピーチを行いました。その4カ月前の4月に、次のような言葉を残しています。「いかなる場所における不正も、それはすべての正義を脅かすものである」という言葉です。学生時代、メイズ学長に社会正義を実現することの大切さを伝えられ、その後、黒人解放運動をととして、社会正義を求め続けてきたキング牧師らしい言葉だと思います。

バーミンガム刑務所からの手紙

実は、この言葉はキング牧師が手紙のなかで綴った言葉です。それも、刑務所の中で書かれた手紙です。1963年4月、キング牧師をはじめとする公民権運動の指導者たちは、バーミンガムという町で人種差別反対を訴えるデモ行進を計画していました。ところが、バーミンガムの裁判官がその計画を差し止めるように請求しました。しかし、キング牧師はその命令に従わず、デモ行進を実行したところ、バーミンガムの警察に逮捕されてしまいました。

キング牧師が投獄された時、バーミンガムの白人牧師たちが連名で地元の新報に「連帯の要請」と題した声明文を投稿しました。その声明文で、白人牧師たちは、キング牧師たちの行ったデモ行進は過激であると述べました。そして、キング牧師たち「よそ者」に、自分たちの町のことをとやかく言われる筋合いはないと訴えました。そして、白人牧師たちはバーミンガムの黒人たちに、キング牧師たちのデモ行進に参加せず、彼ら「よそ者」に対してバーミンガム市民としての連帯を示すように求めました。

この白人牧師たちの声明文に対して書かれたのが、「バーミンガム刑務所からの手紙」と呼ばれる手紙でした。その手紙に、先ほど紹介した「いかなる場所における不正も、それはすべての正義を脅かすものである」という言葉が綴られました。とても長い手紙なのですが、そのなかでキング牧師は、バーミンガムで人種差別が公然と行われているのに、牧師としてなぜその不正義に立ち向かわないのか、なぜ不正義に立ち向かうとするキング牧師たちの援助にまわらないのかと白人牧師たちに訴えました。また、非暴力という手段でデモ行進を行っていた自分たちを、なぜ過激派と呼ぶのかと問いかけました。

しかし手紙の後半で、キング牧師は過激派と呼ばれることに最初は不満を感じていたが、次第にある種の満足感を得るようになったと書いています。それは、イエス・キリストも過激派としてのレッテルを貼られたからです。そして、先ほど読んでいただいたコロサイの信徒への手紙を記した宣教者パウロも過激派としてのレッテルを貼られたからです。しかし、過激派といっても、少し変わった過激派でした。イエスは愛において過激派でした。そして、イエスの教えを地中海の各地に宣べ伝えたパウロは、そのイエスの愛を伝えることにおいて過激派でした。

牢獄からのラブレター

キング牧師が刑務所から手紙を記した時、パウロのことが念頭にあったと言われてます。というのも、聖書のなかの書物となっているパウロの記した手紙のいくつかは、パウロ自身が牢獄から書き送ったものだからです。先ほど司会者の方が読んでくださった聖書の言葉もそうです。パウロがローマの牢獄に入れられていた時に、コロサイという町の教会に連なる人々に宛てて書いたものです。キング牧師はもちろんそのことを知っていますから、バーミンガムの刑務所から手紙を書いた時、パウロが牢獄から手紙を書き送っていたことを意識していたのも当然です。

それでは、パウロは牢獄からどのようなことを綴っていたのでしょうか。コロサイの信徒への手紙3章14節には「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです」と書かれています。この言葉は、キリスト教の結婚式のなかで、よく新郎新婦に贈られる言葉の一つです。私はまだ独身なので結婚生活がどんなものか分かりませんが、結婚をしている友人の話を知っていると、「互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい」という13節の言葉も、結婚している夫婦にとっては大切な言葉のようにも思います。

ただ、パウロが「コロサイの信徒への手紙」を書いていたのが刑務所だということを考えると、パウロは結婚式のことを想定してこの言葉を書いたのではないということが分かります。しかし、パウロが牢獄から綴った手紙は、ある意味で「牢獄からのラブレター」とも言えるかもしれません。それは、手紙に綴られた言葉の根底には、愛が込められているからです。そして、キング牧師が牢獄から綴った言葉にも同じように、愛が込められています。

大阪市西成区の釜ヶ崎で、労働者・野宿者の支援活動が続けておられる本田哲郎さんというカトリックの神父がおられます。本田神父は聖書を私訳されるなかで、聖書に何度も出てくる「愛」という言葉を「人を大切に思う」と訳されています。聖書が伝える「愛」をそのように理解するとするなら、イエスの言葉や行いは、過激なまでに「愛」に満ちあふれています。当時の社会では当然のように差別され、排除されていた人々のもとに行き、「愛」を実践されていきました。当時の常識では考えられないことです。そして、今の時代を生きる私たちにとっても、それはなかなか難しいことです。

さらに、イエスは自分に敵対する人々たちをも愛されました。「敵を愛し、自分を迫害するもののために祈りなさい」という言葉は、愛の過激派だからこそ出てくる言葉ではないでしょうか。社会のなかで苦しみを受ける人、そして自分を苦しめる人をも愛し抜かれたイエスは、最期まで愛の過激派でした。その愛ゆえに、過激なまでに人々を愛されたゆえに、十字架にかけられました。その愛を知ったパウロは、その「愛」を宣べ伝えたために、愛の過激派として何度も投獄されました。

そのような「愛」の過激派の伝統を受け継ぐ者として、キング牧師はたとえ「よそ者」であったとしても、「愛の過激派」として「人を大切に思う」ともって、人種差別という不正が行われているところに駆けつけたのです。そして、キング牧師は愛の過激派として、対立関係にある白人の牧師たちに、人種差別を黙認するのではなく愛の道に立ち返るように、「人を大切に思う」ともって行動するように、愛を込めて牢獄から手紙を送ったのだと思います。

「愛」は間に動く

しかし、イエス、パウロ、キング牧師の3人の歩みを振り返ってみると、3人ともその「愛」ゆえに、犯罪者とされてしまったことが分かります。イエスは処刑され、パウロは長い獄中生活を強いられました。そしてキング牧師も、黒人の自由のために戦い、何度も投獄されました。そして、黒人のためだけでなく、ベトナム戦争に反対する運動にも連帯するようになっていったために暗殺されてしまいました。

これはどんなことを意味するのでしょうか。イエスも、パウロも、キング牧師も「人を大切に思う」をもちながら生きた人々たちです。命を与えられたすべての存在は、愛されるために神様によって創造されたと信じて、その愛のなかにある神様の思いを受け止めながら生きた人々たちです。

しかし、「人を大切に思う」をもっていたために、彼らは犯罪者にされてしまい、イエスやキング牧師にたつては殺されてしまいました。それは、社会そのものにおいて、人が大切にされていないからです。社会の根底に愛がないからです。一人ひとりの人間には愛があったとしても、人間がさまざまに入り組み、社会が形成されていくなかで、人間の思いが神様の思いから離れていってしまうからです。

人間一人ひとりが抱く思いが違えば、そこには対立が生じてしまいます。人間は人の間と書くぐらいですから、そこには間（はざま）が存在します。性別、世代、人種、収入、宗教、さまざまな違いが間（はざま）を生み出してしまいます。

しかし、その間（はざま）にこそ神が働かれます。その間（はざま）にこそ、愛が必要とされるからです。そして、その間（はざま）が愛で満たされる時、そこには固い絆が生まれます。そのことを信じて、イエスもパウロもキング牧師も、その絆を完成させようと、「人を大切に思う」をもち続けながら、それぞれの人生を生きました。そのような思いが、牢獄からラブレターを綴らせたのだと思います。

「一人一人は大切なり」—新島襄とメイズ学長

今日、冒頭で、モアハウス・カレッジの卒業式でのオバマ大統領のスピーチについて紹介しました。そのスピーチのなかで、オバマ大統領は、「キング牧師はモアハウスでメイズ学長の教えの下で恐れないことを学び、そして、人々に恐れないことを教えた」と言いました。分かりやすく言うならば、キング牧師は自分と対立する人々に向き合うことを恐れないことの大切さを、身をもって人々に伝えたということです。それは、イエスにもパウロにも通じることです。

対立する人々に向き合うことは恐れを伴います。しかし、向き合うことと好戦的であることは正反対のものです。向き合うというのは「愛」、「人を大切にしたい」がなければ不可能です。そしてそれは、パウロが「互いに忍び合いなさい」と言ったように、根気が要ります。パウロもキング牧師も根気強く対立する人々を愛し続けました。牢獄に入れられても愛を込めて手紙を送りました。しかし、私たちはイエスやパウロのように、あるいはキング牧師のように根気よく隔ての向こう側にいる人を愛することはできないかもしれません。しかし、それでも向き合おうとすること、愛を、「人を大切にしたい」をもち続けようとするのが大事なのだと思います。

このような「愛」、「人を大切にしたい」は、この同志社大学の創設者である新島襄の理念にもしっかりと表れています。新島襄が語った言葉のなかに、「一人一人は大切にしたい」というものがあります。この言葉は、新島襄が同志社英学校創立10周年の記念式典の式辞のなかで思わず発してしまった言葉だそうです。自分の留守中にある学生が重大な問題を起こし退学処分を受けたことを聞いた新島が、この学生の将来を嘆き悲しみ、涙ながらに感極まって口走った言葉でした。この言葉は、具体的なある学生個人を想起しての言葉だということです。

このことを考えるならば、この「一人一人は大切にしたい」という言葉には、教育者としてだけでなく、キリスト者として、そして、牧師としての新島襄の想いがあふれ出しているように思います。群れから離れてしまった一匹の羊、失われてしまった一匹の羊を大切にされるイエスの姿に重なります。他に99匹いるのだから一匹ぐらいいなくなってもいいというのではなく、そのように価値のないものと思われるような小さな者、弱くされた者を最も大切にしないといけないというイエスの教えを、新島襄のこの言葉から思い起こします。

この新島襄の言葉とモアハウス・カレッジのメイズ学長の言葉、「どの大学も、有能な学生を育てるだけでは十分ではない。誠実な人物、公共の場においても私的な場においても信頼のできる人物、そして、社会における不正、痛み、不正義に敏感であり、それらの社会悪を正すための責任を喜んで受け入れる人物を育てなければならない」という言葉は、同じキリスト者として、同じ教育者としての立場から発せられたものだと思います。社会のなかで大切にされていない人々のために自分の働きを捧げる、愛のある人間として歩んでほしいという、学生たちへの願いが感じられます。

新島襄は、「人を大切にしたい」、「愛」を、この同志社の教育理念の根底に据えていたということです。それは、学生一人ひとりを大切にしたいというだけでなく、社会のなかで排除されたり、差別されたりしている人を大切にしたいという学生を育てる使命が同志社にはあるということだと思います。

同志社で学ばれている学生の皆さん、教鞭をとっておられる先生たち、そして、学生と教員を支えておられる職員の皆さん、パウロが伝えるように、「愛」を身につけて、そして、「一人一人を大切にしたい」という思いをもつことによって、これからの一人おひとりの歩みのなかで、人と人との間に絆を完成させていくことができるようにと願っています。

2014年6月4日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録